
女子大生とバカ男

あいにゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女子大生とバカ男

【Nコード】

N4940D

【作者名】

あいちゃん

【あらすじ】

シェイクスピアの「ロミオとジュリエット」のパロディ。お金持ちの女の子ジュリエットとちょっとマヌケな男の子の悲しくも儂い恋の話・・・だと思っ。

第一話

ある街にある美人な女子大生がいました。

彼女の家はとてもお金持ちで

その辺りではまあまあ有名な高級住宅街に住んでいました

そしてまたそこから少し離れた桜の名所に

とてもお金持ちで成績優秀でキレイな顔した男の子が住んでいました。

しかし彼は学力における偏差値は高いのですが
どうしようもない欠点を抱えていたのです。

ある日、女の子は学校で友達と話していました。

「なあなあジュリエット〜今度合コンせーへん？」

「あ、でもジュリエット彼氏おったんやっけ？」

「・・・合コン参加で」

「あれ？彼氏ええの？」

「別れたし・・・」

「マジで！？やったージュリエット参加ね！」

「で、幹事は誰なん？」

「あ、私。彼氏の学校の人呼んで貰うから期待しててー!!」

「あんたの彼氏って、ダメ男じゃ・・・」

一同は不安でしたが

華の女子大生

合コンに行かないわけありません

そして合コンの当日。

巻紙ミニスカというやたらと気合の入った格好で女の子が集まったのに対し

男の子はいかにも東京の某テクノパラダイスで見かけそうな服装でした。

「ねえちょっと！アンタの彼氏って・・・」

ジュリエットが幹事の女の子に言い寄ったときその後ろにいた男の子に目を奪われました。

ジュリエットは一瞬で恋に落ちてしまったのです。

その時相手の男の子もジュリエットに心を奪われてしまったのです。しかしながらその男の子は幹事の女の子の彼氏だったのです。

そんなことはジュリエットには問題ではないのです

持ち前のポジティブ思考、美貌、金、その他もろもろ

全てにおいて自信がありました。

それと同時に、それら全てを捨てても彼と結ばれたい一心でした。まだ会話したこともない友達の彼氏なのに・・・。

しかしそんな彼は

お酒は飲めない、飲んだら暴れる、バカ男の

三拍子そろった扱いにくい人なのです。

合コンでも寄った勢いで・・・

「はじめまして、俺ロミオ。しくよろー」

「は・・・はは・・・はじめまして」

「君可愛いね。俺うちフォーリンラブしちゃったよ」

「は・・・はは・・・はい」

「今から2人で抜け出してどっかお茶でもいこーやー」

「は・・・はは・・・はい」

「じゃートイレ行くフリして抜け出そうぞ」

と初めての会話で合コン抜け出し大作戦を立てるのでした。

しかしロミオ君には彼女が・・・

第二話

ジュリエットは気がつきました。

ロミオは自分の友達の彼氏なのです。
友情をとるか恋をとるか

でも私には彼しかいない気がする!!! (心の声)

「ごめん、私お手洗い行ってくるね」

「はい、いつてらっしゃーい」

そんな中ロミオ君は

「飲まんとやつとられんわー」

「ロミオ！幹事なんだからそんなに飲まないで！
ばっちり彼女に監視されていました。」

トイレに行かず入り口付近でジュリエットは待っていました。

そんなときヲタクルツクの少年がやってきました。

「やあジュリエットちゃんだよね？」

「はい」

「こんなとこで何してるの？」

「何だつていいでしょ・・・」

「そんないわんとさー君かわいいね」

「ありがとう」

ガッシャーーン

店の奥でガラスが割れる音がしました。
嫌な予感がしたのでジュリエットは急いで戻りました。

嫌な予感が的中です。

お酒を飲みすぎてロミオ君が暴れていました。

「だから俺はジュリエットのことを好きやってゆーとるやろが!」

「きゃー暴れないで!!!」

「私の立場はどーなるんよ!!!」

「お前とは別れる」

「ちよつとそれどーゆーこと!?!」

「だからお前と別れてジュリエットと付き合っんや!」

「なんでジュリエットなんよ!?!」

「もう、ケンカはやめて!!!」

ジュリエットは止めに入りました。

「私は、彼が必要な。ごめんなさい」

「えー!!!!?!?!」

「ちよつとジュリエット、どーゆーこと?人の彼氏とっついて・・・」

「ごめん・・・だけど・・・」

その時ロミオ君がジュリエットの右手を掴み

全力でジュリエットを引きずりながら

お店を出て行きました。

お店は荒れ放題。

誰が弁償するのでしょうか?

夜の街にはジュリエットの叫び声が響きます。

「イダー……イ……！」

「引きずるなああ……！」

第三話

合コンを抜け出したジュリエットとロミオ君

2人は行き場をなくし困っていました。

エンジ色の電車が通るすぐ側の公園のベンチでしばらく休むことにしました。

「引きずるなんて、ヒドイ」

「すまない・・・」

「アンタって奴はホント最っ低な奴ね」

「ごめんなさい・・・」

「ケンカはオヤメナサイ！」

後ろから声がしました。

「アンタ、誰？」

ジュリエットは後ろにいた不審な男に聞きます。

見た目は思いつきり関西のオヤジ。

頭部はザビエルのようにになっており、某虎軍団のはつぴを着て聖書を持っている

いかにも「胡散臭い」おじさんでした。

「ワタシはローレンスと言います」

「何で片言なんよ？」

「最近日本に来たばかりでよく分からないアルね」

「いや、それウソやろ」

「本当デス。阪神優勝」

「もういいから、ほっといて」

「いえいえ、ケンカの訳を聞かせてくだサーイ」

どうやら一番ややこしい人につかまってしまったみたいです。

ロミオ君が珍しく男らしく立ち向かいます。

「今からいいとこなんでお引取り願えませんか？」

「もしもし君たち帰りなさい」

ローレンスは2人を切り裂く言葉をかけました

「やっぱしアンタ思いつきり日本人やろ？」

「いいえ違いマース」

「もうええから帰って」

「仲直りしてくだサイねー結婚式やご相談はロレンス教会まで」
そんなことを言い残してローレンスは帰っていきました。

再び公園には

ジュリエットとロミオの2人つきりです。

「やっとおのおっさんどっか行っただね」

「ああ。これで2人」

「2人……」

「……」

「……」

ジュリエットは大変なことに気付きました！

2人のときに会話がなし……

第四話

会話がなくて困っていたところ
ロミオ君が話し始めました

「こんな俺でいいん？」

「引きずらなかつたら・・・」

「じゃあ結婚しよう！」

「はあ!？」

「俺じゃあかんの？」

「いあ・・・だってまだ学生やし・・・」

「卒業して、すぐ結婚しよう」

「でも・・・」

「何をそんな困ってるん？」

「だって突然だし、出会ったばっかやし・・・」

「何言っとん？俺ら運命やろ？」

「え・・・？」

「出会ってビビビ」

「・・・はあ」

「な？だから、結婚しよう」

「うん」

ロミオ君は子供のようにはしゃぎまわりました。

「家まで送るよ」

「ありがとう。ウチの親に会っ？」

「うふお！挨拶しとくわ！」

「パパもびっくりするやろな。えへへ」
「お父さん、娘さんを下さい！」
「そんな言ったらパパ倒れちゃうよ」
「あはは」
「あはは」
「……」
「……」

再び会話がなくなってしまう。
これからもこんな調子なのかな？
とジュリエットは思いましたが
ある意味話題を探さなくても楽かな
みたいに思ったのです。

2人は夜の街を手をつないで歩きました。
ゆっくり歩幅をあわせて
ゆっくりゆっくり……

駅に着きました
2人でジュリエットの地元に向かいます
夜遅いせいか
エンジ色の電車には
ジュリエットとロミオ君
たった2人だけです

緑色のシートに腰かけ
ミュージカルの広告を見つめ
駅はどんどん過ぎていきます。

一つ手前の駅でドアが閉まったとき

ロミオ君はジュリエットを抱き寄せました

「何？」

「いあ、あと少しだから」

「うん」

「誰もいないし」

「うん」

ちゅどーん（心の声）

唇が触れてしまった！！！不覚にも！

とジュリエットは思いました。

そうしてジュリエットの家に着きました。

「大きな家だね」

「うん。パパ社長なの」

「へえ……」

ガチャ

「ただいまー！！！彼氏連れてきちゃった！」

「おかえりー彼氏さん？」

「うん、あ、ロミオ君入って」

「あ、うん。おじゃまします。」

ジュリエットの両親が玄関先に来ました。

「パパ、ママ、この人が私の彼氏の……」

その時ジュリエットの父親は叫びました。

「そいつと離れなさい！」

「え？パパ？」

「そいつは……そいつは……」

「私の彼氏よ？」

「うちの会社の製品の海賊版ばかりを作る会社の息子だ」
「え……」
「離れる。お前もうちの娘に近寄るな！」
「待って、パパ！彼はいい人なの！」
「いい人なわけあるかい！」
「いい人よ。ねえロミオ君！！！」
「俺は……親父の会社なんて継ぎません……」
「どいつもこいつもふざけやがって！」

お父さんはカンカンに怒って奥の部屋に消えました。
お母さんが言いました

「ごめんなさいね……えっと……メロン君」
「いえ……ロミオです」
「あ、メロン君、ごめんね。私横文字弱くて」
「だからロミオ……。」
「あの人お酒はいつてるから……また来てくれるかな？」
「いいともー」
「ホントごめんねメロン君」
「いあ……だから……もういいです。今日は失礼します」
「え、ロミオ君もう帰るの？」
「だって、お父さん怒らせたし……」
「そっか……おやすみメロン君」
「だから俺はメロンじゃねー」
「そんなの関係ねえ」
「おっぱっぴー」
「おやすみ」
「おやすみ」

そうしてロミオ君は家路につきました。

第五話

次の日

父親に交際を反対されたジュリエットは

ロミオ君と共に

胡散臭いローレンスの元へ

相談に行くことになりました。

「あのおっさんで大丈夫かな？」

「でも俺らあの人以外に頼れくないか？」

「それもそうだけど・・・」

「大丈夫、一応牧師だ」

「モグリの牧師だよ、アレ」

「俺も偽者だと思ってる」

「そうだよね・・・ってダメやん！」

「まあ仕方ないではないか」

「そやね・・・」

2人は教会と思われるところに着きました。

「すみませーん、牧師さんいらっしやいますか？」

すると奥から声が聞こえました

「あ？昨日の2人？ちよつとまってー」

ジュリエットはロミオ君に言いました。

「ちよつと昨日と喋り方違うくない？」

「うん・・・」

すると奥から

今にも「どんだけー」と言いたくなるようなはだけた格好で
体格のいい頭部がザビエル状の人が現れました。

「ごめんなさい、待ったかしら？」

「・・・」

ジュリエットは言いました

「あのう・・・ローレンスさんは・・・？」

「私ですよ 昨日の彼女ね」

「いあ・・・あなた全然違うかと・・・」

「んもう、失礼しちゃう！夜はあんなんだけど本当のワタシはコレ
よ」

「え・・・冗談を・・・」

ロミオ君は言いました。

「いや、彼は昨日の奴や。頭部が同じだ」

「え・・・あ・・・ホンマや！」

「いあん！失礼しちゃう」

とりあえず不審な牧師ですが

2人は一部始終をローレンスに話しました。

「禁断の恋ね！ワタシもえちゃう！！！」

「そんなことより私たちがどうしたらいいでしょうか・・・」

「そうね・・・結婚式しちやいなさい！」

「えー！ー！！！！？」

「既成事実なら誰も反対しないワ」

「でも・・・急には・・・」

「大丈夫よ。ここは教会だし、ワタシだっているわ」
「アンタが一番不安なんだよ・・・」

ということだ

急遽2人の結婚式が行われることになりました。

「ロミオ君はもちろんジュリちゃんに愛を誓うわね？」

「もちろんだす」

だす・・・？（心の声）

「ジュリちゃんもロミオ君愛してるわよね？」

「一応・・・」

「じゃあ、2人でちゅーしてちよーだい」

「え・・・」

「誓いのちゅーよ」

ジュリエットは昨日の電車の中を思い出しました。

たったあれだけで、思い出しただけで

心臓が飛び出しそうです。

そうしているうちにまたロミオ君が近づき・・・

ちゅどーん

「もうジュリちゃんったらウブなんだから

これで2人も幸せになれたらいいけど・・・」

そうして結婚式は終わり

2人は駆け落ちすることにしました。

誰も知らないどこか遠くへ・・・。

そうして2人はタコの町で新しい生活を始めることにしました。

2人の甘い新婚生活も2週間たったころ
ロミオ君は町へ仕事にジュリエットは家で洗濯をしていました。
そんなある日、二人の家にあるお客さんが来ました。

「突然尋ねてすみません。マーキューシオです」
ロミオ君の大親友のマーキューシオ君でした。

「何もないけど上がってください。どうしたんですか？」
ジュリエットは聞きました。

「とつても大変なことになってます。」

「え？どうということ？」

「ジュリエットさんの親御さんが大変怒ってまして……」

「うん……」

「ロミオの父親と敵対してるのはご存知ですよね？」

「はい」

「2人の争いが激化して黒魔術の横行や牛の刻参りなどが多発して
まして」

「……」

「2人にも魔の手が忍び寄っています」

「え……でも……」

「お願いです。もっと遠く、海外に行ってください」

「……」

「俺は2人に幸せになってもらいたくて命を懸けてここまで来まし
た」

「でも……そんな……」

「俺にも黒魔術が……ゲハッ……」

マーキューシオは倒れこんでしまいました。

「だ……大丈夫ですか？」

「お・・・俺は・・・2人を守りたくて・・・」

「救急車呼びますから、喋らないで！」

「い・・・いいんで・・・早く・・・にげ・・・て・・・くだ・・・」

「

ボタン・・・」

マーキューシオは息をしていません。

黒魔術の餌食となってしまうたのです。

「どうしよう・・・ロミオ君・・・」

はてさて、えらいことになっちゃいました。

丑三つ時に不審者を見かけたら

きつとそれはこの争いの関係者です。

第六話

ジュリエットから連絡を受け

ロミオ君は仕事を放置して家に帰ってきました。

ロミオ君は家に入るなり

信じられない光景を目の当たりにしました

「なんでお前が膝枕してんねん！」

ジュリエットは

もう動かないマーキューシオを

まだ救えると信じ

膝枕していたのです。

「もうええから離れろ！」

「でも・・・可哀相だし・・・」

「お前は俺より死体を抱くんか？」

「そういうわけじゃなくて・・・」

「ただの屍は放置しとけ！」

「ヒドイ」

「敵は俺が討つ」

「え・・・？」

「俺、こう見えて黒魔術2級なんやぞ」

「黒魔術に検定なんてあるんや」

「いや、自称だけどな」

「意味ないやん！」

そういうわけで

ロミオ君が親友の敵討ちをすることになりました。

マーキューシオの黒魔術は

ジュリエットの従兄弟のティボルトによるものだということが分かりました。

早速ロミオ君は腹痛の黒魔術を試してみました。

ミス

ティボルトはみがまえた！！！！

ロミオくんのこうげき！！！！

地獄の黒魔術をとねえた！！！！

ティボルトは1000のダメージを受けた！！！！

ティボルトはしんでしまった

「敵討ち完了しました！」

しかし、この敵討ちが

2人をさらに追い詰めることになってしまったのです。

ティボルトがロミオ君の黒魔術によって死んでしまったことを知った

ジュリエットの実家の町内会会長エスカラスさんは

ロミオ君とジュリエットの捜索に本格的に乗り出します。

そんなことを知らずに
ロミオ君とジュリエットは
甘い甘い新婚生活を送っていたのです。

ある日の深夜でした。

「うーん、ジュリエット・・・」

「どうしたん？あ？寝言？」

「どこにも行かんとして・・・」

「こんな遅くにどこも行かんわ」

ガチャガチャ・・・

「ちょ・・・ロミオ君！！！！」

「ジュリエットー（抱き）」

「ちょ・・・ドアを誰かがいじってる！」

「俺の心のドアをノック横山」

「・・・おい！」

キィィィ・・・

「ちょ・・・ドアあいたつてば！！！！」

「ジュリエットの心のドアも開けて」

「何言ってるんよ？え・・・きやつ・・・」

「ジュリエット・・・？」

「・・・」

「ジュテーム？」

「・・・」

「おい？無視かよ？」

「・・・」

「いい加減にせえよ！おい！」

「・・・」

「ジュリエット？おらんの？」

「・・・」

そこにはジュリエットの姿はなく
一枚の手紙だけが置いてありました

『ジュリエットは返してもらった。
Youは二度と町内のアイドル、ジュリエットに近づくんじやでき
ない!』

ジュリエットは
エスカラスさんの刺客によって
地元連れ戻されたのでした。

次の日の朝

ロミオ君は始発の電車で
ジュリエットの地元へ向かいました。

しかしジュリエットの家周りには
警備員のオッサン方がずらりと隙間無く並んでいたのです。

ああ、もう愛しのジュリエットには近づけないのか
そうロミオ君が思ったとき
バルコニーにジュリエットが出てきたのです

「ああロミオ、どうしてあなたはロミオなの・・・」
とどこかで聞いたことあるようなことを
ジュリエットは叫びました。

ロミオ君もバルコニーに向かって叫びました

「ジュリエーラ」

「ロミオ……ロミオ……!!」

「俺、改名するから！何がいい？」

「え……？」

「ロミオって名前気に入らんのやろ？」

「……このクソダボが……!!」

「待ってる！迎えに行くからな！」

「……そうこなくっちゃ！」

最終話

ロミオ君は考えました。
頼れる人がいない
頼れるのはたった一人

ローレンス

ロミオ君はローレンスの所に行くことにしました。

「あら、いらつしゃい」

ローレンスはハーブティーを飲んでいました。
ロミオ君にもハーブティを勧めました。
しかしながら

ロミオ君にはそんな余裕はなく

一部始終をローレンスに話し始めました。

「ロミオ君、わかったわ。でも・・・」

「やっぱりもう諦めるべきですか？」

「違うわ。お茶が冷めちゃってるわよ！」

「そんなことどーでもいいし」

「もう、冷めたら美味しくないのよ！」

「すみません・・・」

「いいのよ！いい男が謝っちゃダメ！」

「はあ・・・」

「ジュリちゃんのごことはワタシに任せて！」

「いいんですか？」

「ワタシが彼女を連れてきてあげる。だけど・・・」

「だけど？」
「一歩もウチから出たらダメよ！」
「わかりました」

そうしてローレンスはジュリエットの家に向かいました。

ピンポン

「どなた？」

「あ、ワタシ、ジュリちゃんのお友達ですの。」

「ジュリエットの？あ、上がってください」

ローレンスは明らかにはげた男だったにも関わらず
家に入れてもらうことができました。

ジュリエットの部屋につきました。

「まあ可愛い部屋ね。お邪魔するわね。」

「邪魔するなら帰って」

ジュリエットは泣いていました。

「もうジュリちゃん冗談キツイわよ！」

「ローレンスさん・・・私・・・」

「可愛い子が泣いてたら台無しよ！涙を拭きなさい」

「でも・・・ロミオ君が・・・」

「そう、ワタシはそれで来たの」

「え・・・？」

「あなた、死んだフリしなさい！」

「そんなん無理です」

「じゃあこの薬をあげるわ。」

「何ですか・・・？」

「一時的に仮死状態になる薬よ」

「これ飲んでどうするんですか？」

「あなたは遺書を書いて薬を飲むの」

「はい」

「遺書にはウチの教会で葬式するよつに書くのよ!」

「はい」

「そしたらウチにロミオがいるわ」

「教会でロミオと会えばいいんですね!」

「ええ。そして2人で海外に逃げなさい!」

「明日の朝飲むのよ。効果は12時間だから」

「わかりました。ありがとうございます!」

「ちゃんとやるのよ!」

「はい」

そうしてローレンスは帰っていきました。

ジュリエットは言われたとおり遺書を書きました

『愛するパパとママ

ロミオ君と会えない日々を送ることは

私には無理です

ごめんなさい

お葬式は

お世話になったローレンスさんの教会で

執り行つてください

ジュリエット』

そしてジュリエットは薬を飲みました

次の日の朝

ジュリエットの家の執事さん(めえ!)が

冷たくなって動かないジュリエットを見つけてました

「お嬢様！大丈夫ですかめえ！」

「……………」

「し……死んでるめえ！」

ジュリエットの両親は

ジュリエットの望みどおり

ローレンス教会で葬儀を行うことにしました。

「はい、お葬式、ジュリエットさんですね。」

「はい……お願いします」

「いいですよ。」

「すみません、娘のわがママを……」

「気になさらないで。では前金50万円お願いします」

「え……？」

「あ、ウチは前金いただくシステムとなってますので」

「お宅教会ですよね……？」

「すみませーん、葬式業務は別ですので」

「（きたねーな……）わかりました」

「ともあれ、お召し物も変えられた方がいいわ」

「じゃあ私たちは家で着替えてきます」

「ええ、ごゆつくり……」

そうしてローレンスは

冷たいジュリエットと50万円を受け取りました。

「作戦成功ね！」

「何が成功だよ」

後ろにロミオ君が立っていました

「あ、ロミオ君出てきちゃダメじゃない！」

「出てくるもなんも・・・ジュリエット死んでもたやんけ！」
「死んでないわよ・・・あ・・・言っただけ？」
ローレンスは気がつきました

ロミオ君にこの作戦を伝えることを
すっかり忘れていたのです！！！！

しかし気付いたときは遅すぎました。

ロミオ君は持っていたカッターナイフを握り締めていました

「ローレンス・・・貴様・・・」

「違うの・・・だから・・・ジュリちゃんは・・・」
グザッ

ロミオ君はローレンスの頸動脈を切りつけました。
血が噴水のように飛び散ります。

ローレンスをたおした

「ジュリエット・・・すまん・・・」

ジュリエットはうごかない

ただのしかばねのようだ

「今からお前んとこ逝くよ・・・」

そしてロミオ君は自分の左手首を切りつけました
血が川のように流れていきます

この騒ぎでジュリエットは目を覚ましてしまいました

「もぉ・・・うるさいなあ・・・」

「・・・」

「なんか臭いし・・・って・・・」

ジュリエットは目の前が血の海で

ローレンスとロミオ君が倒れていました

「え・・・どーゆーことよ!?!?」

ジュリエットは気が動転してしまったので
落ちていたカッターナイフで
自分のいたる所を切りつけてしまいました。
気付いたときには自分は真っ赤になっていき
目の前が真っ白くなっていったような気がしました。

ジュリエットはたおれた
パーティはぜんめつした

1時間後

ジュリエットの両親は教会で
動かない三人を目の当たりにし
全てのからくりを知ってしまったのです。

この事件から1カ月後
敵対していたジュリエットとロミオ君の父親は
和解することになりました
ジュリエットとロミオ君は
2人は同じ墓で眠ることができました

しかし

2人はもう、いません

一緒に笑うことも泣くことも
そんなすがたを見ることもできないのです

若すぎる2人の死

誰もが悲しみを忘れることができないでしょう。

海の見える大きな前方後円墳で

よく人身事故を起こす電車と田舎の電車を見ながら

今日も2人は

安らかに眠っています

そしてその隣の

小さな円墳で

ローレンスが眠っていることでしょう

そしてその後

どこかで見たことあるような懐かしくて暖かいまぶしい光に包まれたロミオ君。

目を開けると目の前にいたのは……

「あら、お目覚めになった？」

ローレンスだった……。

「なんでお前がおんねん！ジュリエットは!？」

「ジュリちゃん生きてたのに、ロミオ君が殺しちゃうから……」

「え……」

ロミオ君は自分の過ちに天国にて気がつきました。
遅すぎです。

「まあ、もういいじゃない！」

「よくなー」

「ここは天国よ！酒は美味しいしねーちゃんはキレイよー！」

「そんな気には……」

きれいなおねえさんがたくさんいます。
手招きをされているような気がします。

「お……おらは……」

「ほら、ジュリちゃんもいないことだし」

「おらはしんじまっただー！ー！ー！ー！ー！ー！」

ともあれロミオ君は天国で羽を伸ばしていくことを決意しました。
そしてローレンスも何故か女遊びをしようと思いつきました。

「ちよつと！あんたら！」

ジュリエットが来てしまいました。

「あ、ジュリエット・・・あいたかった！ー！ー！」

「あらまあ！さっきまでねーちゃんキレイしとか言ってたじゃない
！」

「そんなこと言っていない！俺にはジュリエットだけや！」

「てか私、一部始終見てたんですけど・・・」

「・・・」

と・・・とりあえず

天国で皆仲良く暮らしましたとさ。

「てかローレンスっておかまじゃなかったの！？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4940d/>

女子大生とバカ男

2010年10月17日01時34分発行